

方言文学としての『悪人』

崎 村 弘 文

“*Akunin*” as a Novel Using Dialectal Dialogues between Two or More Persons

Hirofumi SAKIMURA

【要約】 「3. まとめ」参照

【キー・ワード】 『悪人』 方言文学 肥筑方言

0. はじめに

0-1 小説『悪人』は、長崎市出身の作家吉田修一の手になるサスペンス作品で、2007年の刊。全編に九州北部——福岡・佐賀・長崎等——の若年層・中年層のものを中心とする方言の会話が散りばめられ、異色の文学作品となっている。映画化もされ、海外の映画祭での賞を受けるなど高い評価を得ていることは、既に周知のことであろう。

筆者は、福岡県久留米市で生まれ育ち、作中人物の一部と母方言を同じくすることも有り、方言研究者として、同作品の方言表現に強い興味を覚えていた。そこで、本稿では、同作品の方言会話表現の性格について分析し、その特徴、実際の方言との異同、描写の当否などについて、詳しく論じてみたいと思うものである。

1-2 分析に当たっては、2009年11月30日朝日新聞出版刊、朝日文庫『悪人 上・下』を底本とすることとし、会話文例を抽出した。以下、「上」「下」「～頁」などは、全て同本のそれである。なお、以下に用例等を示すに当たって、原文のタテ書きをヨコ書きに改めた。

1. 描写の全般的傾向

1-1 一言で言って、大きな破綻も無く、いかにも描かれた時点現在の当該地域の若年層・中年層ほかが用いそうな方言の、描写になっている。長崎市の方言は、作者がそもそも長崎市の生まれ育ちの中年層であるとのこと（注1）から、自家菜籠中のもんとして表現を駆使し得るのであろうと推測されるが、そのほかの福岡県久留米市・福岡県福岡市・佐賀県佐賀市等の方言もかなりの精度で描き分けられ、それぞれの位置を占めていることは、背景として作者の方言体験もしくは方言情報の提供者が有ったことを想定しなければ説明出来ない。瑕瑾に目をつむれば、専門の研究者によるものでもないのに「出来過ぎ」ということである。

1-2 そうした事実を例証する前に、あらかじめ、作品の構成・登場人物・発話の頻度

等について概観しておこう。

「上」265頁・「下」275頁、計540頁は、全五章に分けられている。即ち、「上」：第一章「彼女は誰に会いたかったか？」102頁、第二章「彼は誰に会いたかったか？」102頁、第三章「彼女は誰に出会ったか？」55頁、「下」：第三章つづき52頁（第三章計107頁）、第四章「彼は誰に出会ったか？」106頁、最終章「私が出会った悪人」111頁である。さらに、それぞれの章は、(一)13小節、(二)9小節、(三)12小節、(四)13小節、(終)24小節に分けられ、それぞれの小節で場面・登場人物が変化する仕立てになっている。

1-3 「今度の年末年始ね、戻らんってよ……」の如き「～」を1発話として勘定してみると、第一章では●主人公「清水祐一（長崎市出身。長崎弁をしゃべる）」が9発話、祐一に殺される被害者「石橋佳乃（久留米市出身。以下三人は福岡市域共通語とでもいうべき言葉をしゃべる）」が73発話、佳乃の同僚「安達眞子（熊本県人吉市出身）」が91発話、同じく「谷元沙里（鹿児島市出身）」が59発話、同じく「仲町鈴香（埼玉県一西部？一出身。東京弁風のしゃべり）」が18発話、佳乃の上司「寺内吾郎（福岡市出身？ 福岡市域共通語をしゃべる）」が4発話、その他の佳乃の職場関係者（福岡市域共通語をしゃべっていると見て良いか）が7発話（男2発話、女5発話）、沙里の母（鹿児島市出身？ 発話は鹿児島弁的でない）が1発話●佳乃の父で理容「イシバシ」の経営者「石橋佳男。（久留米出身と見られる。久留米弁をしゃべる）」が20発話、同母「石橋里子（同）」が16発話、「イシバシ」の客（同）が1発話、佳男の同業者（久留米弁をしゃべっていると見て良いか）4発話（男2発話、女2発話）、「東京の若者（東京弁）」1発話、「大阪のテレビ局の人（大阪弁?）」1発話、●佳乃を殺害される場所まで連れて行った大学生「増尾圭吾（大分県由布市出身。大分弁的なところの混じる福岡市域共通語をしゃべる）」が2発話（ただし携帯メールによるそれ。通例、口頭での発話とそうしたメールにおける発話とでは微妙にその特徴を異にするものであるが、全編を通して表現されているメール発話を検討してみたところでは、それらを口頭による発話として表現されているものとあえて区別して取り扱うべきほどの差異は認められなかった。したがって、ここでも同様に勘定に入れることとする）、増尾の後輩「土浦洋介（埼玉一西部？一出身。東京弁風のしゃべり）」11発話、土浦の高校の友人（東京弁風のしゃべりと見得るか）1発話、●出会い系サイトのメール（書き手の出身地不明。東京風のしゃべり）が1発話、テレビのレポーター（全国共通語）が2発話、「第一発見者（福岡弁をしゃべっていると見て良いか）」が1発話、祐一の職場関係者（長崎弁）が1発話、祐一の知人（長崎弁）が2発話、●福岡の警察関係者（出身地不明。やや全国共通語的なところの多い福岡市域共通語をしゃべる）が15発話。計341発話である。

1-4 第二章では、●祐一が54発話、祐一の親戚で解体業を営む「矢島憲夫（長崎市出身。長崎弁をしゃべる）」が43発話、憲夫の妻「矢島実千代（出身地不明。しゃべっているのは長崎弁と見得るか）」が1発話、矢島の部下（長崎市出身？ 長崎弁）が12発話、祐一の祖母「清水房枝（長崎市出身。長崎弁）」が80発話、同祖父「矢島勝治（長崎市出身。長崎弁）」が5発話、祐一が一時通い詰めたヘルス嬢「金子美保（出身地不明。しゃべっているのは長崎弁風の言葉と見得るか）」が38発話、ヘルスの客（どこの言葉とも分らぬしゃべり）が1発話、房江の近所の「岡崎のばあさん（長崎市出身？ 長崎弁）」が7発話、「堤下（出身地不明。長崎弁風のしゃべり）」7発話、（病院の）老婆（出身地不明。

しゃべっているのは長崎弁と見得るか)が3発話、看護師(出身地不明。しゃべっているのは長崎弁と見得るか)が3発話、祐一の友人「柴田一二三(長崎市出身。長崎弁)」が20発話、一二三の女友達(長崎市出身か?しゃべっているのは長崎弁風の言葉)が1発話、三瀬峠の幽霊(生前の出身地不明。しゃべっているのは福岡市域共通語風にも、或いはもつと広く九州西北部方言(肥筑方言)のいずれかとも取れる言葉である)が2発話、●増尾が15発話、増尾の友人「鶴田公紀(福岡市出身。博多弁)」が11発話、佳乃が12発話、眞子が1発話、沙里が1発話、進学塾講師「林完二(出身地不明。ここでは全国共通語風の言葉をしゃべっているが、「下」50頁～54頁の独白(供述)のそれを見ると、通例は、福岡市域共通語風の言葉をしゃべるらしい)」が15発話、テレビの報道(全国共通語ないし文章語)が3発話、●福岡の警察関係者(出身地不明。やや全国共通語的なところの多い福岡市域共通語をしゃべる)が11発話、長崎の警察関係者(長崎市出身か?長崎弁風の言葉をしゃべる)が12発話、房江の近所の「駐在(長崎市出身か?長崎弁をしゃべる)」が14発話。計372発話である。

1-5 第三章「上」分では、●紳士服量販店「若葉」の従業員「馬込光代(佐賀市出身。佐賀弁をしゃべる)」が18発話、「若葉」の店長(佐賀市出身か?佐賀弁をしゃべる)が1発話、「若葉」の売り場主任「水谷和子(佐賀市出身か?佐賀弁をしゃべる)」が8発話、水谷の夫(佐賀市出身か?どこの言葉とも分からぬしゃべり)が2発話、「若葉」の男客(出身地不明。どこの言葉とも分からぬしゃべり)が2発話、光代のアパートの建設業者或いは大家(出身地不明。全国共通語風のしゃべり)が1発話、光代の友人(地元在住)(佐賀市出身。佐賀弁をしゃべる)が1発話、光代の友人(福岡市在住)(佐賀市出身。福岡市域共通語風の言葉をしゃべる)が2発話、光代の妹「馬込珠代(佐賀市出身。佐賀弁)が17発話、●祐一が44発話、石橋佳男が15発話、石橋里子が7発話、佳乃が16発話、眞子が1発話、沙里が1発話、佳男の親戚(久留米市ないし九州西北部の出身か?肥筑方言風の言葉をしゃべる)が5発話(男1発話、女4発話)、葬儀屋(出身地不明。全国共通語的な言葉をしゃべる)が1発話、「イシバシ」の近所のラーメン屋(久留米市出身か?久留米弁と取れるしゃべり)が1発話、湯布院の旅館の女将(出身地不明。全国共通語的なしゃべり)が1発話、●テレビのレポーター(全国共通語)が3発話、●増尾圭吾(福岡市域共通語)が18発話、鶴田公紀(博多弁)が11発話(「」無しの心中言5発話を含む)、不審者(出身地不明。東京弁風にも取れるしゃべり)が1発話。計175発話である。

第三章「下」分では、●光代が35発話、祐一が29発話、珠代が1発話(ただし、27頁～33頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える。発話の切れ目がどこか判然としないため)、増尾が23発話、●佳乃が24発話、林完二が1発話(ただし、50頁～54頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える。理由は珠代のその場合と同じ)、●房枝が8発話、堤下の仲間(出身地不明。肥筑方言風のしゃべり)が2発話。計123発話である。

1-6 第四章では、●「若葉」の男客(A)(佐賀市出身か。佐賀弁をしゃべる)が8発話、同(B)(同)が8発話、光代が133発話、水谷が13発話、「若葉」の店長が3発話、珠代が12発話、祐一が95発話、祐一の母「依子」が8発話、●房枝が3発話、憲夫が15発話(うち1発話は、83頁～87頁の独白(供述)をまとめて1発話と数える)、実千代が2発話、堤下の仲間(全国共通語的なしゃべり)が1発話、房江の町内の人(長崎市出身か?

長崎弁風のしゃべり)が2発話、●佳男が25発話、里子が3発話、佳男の親戚が2発話(男1発話、女1発話)、佳乃が21発話、呼子のイカ料理屋のおばさん(出身地不明。肥筑方言風のしゃべり)が8発話、嫌がらせ(全国共通語風の言葉)が4発話、●増尾が17発話、増尾の友人たち(出身地不明。福岡市域共通語と見て良いか)が6発話(男4発話、女2発話)、鶴田が1発話、●ラジオのアナウンサー(全国共通語)が1発話、長崎の警察関係者が5発話、久留米の警察関係者(久留米出身か? やや全国共通語的なところの多い久留米弁風の言葉をしゃべる)が12発話、真つ暗な峠(全国共通語? 或いは文章語?)が1発話。計409発話である。

1-7 最終章では、●房枝が27発話(「」無し的心中言4発話を含む)、実千代が2発話、堤下の仲間(全国共通語的なしゃべりと肥筑方言的しゃべりが混じる)が12発話、金子美保が1発話(ただし、264頁~267頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える)、●光代が72発話(うち1発話は、272頁~275頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える)、祐一が33発話(うち1発話は、267頁~271頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える)、珠代が15発話、祐一の母「依子」が12発話(うち1発話は、201頁~205頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える)ラブホテルの従業員(出身地不明。肥筑方言と見ても良いかと思われるしゃべり)が2発話、ラブホテルのノートの記載(書き手の出身地不明。全国共通語ないし文章語の言葉の中にわずかに肥筑方言とも取れるような特徴が混じる)が3発話、●柴田一二三が1発話(ただし、177頁~181頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える)、灯台にきた男たち(長崎県北松の出身か? 肥筑方言風にしゃべる)が11発話、老婆(長崎県北松の人物か? 肥筑方言風にしゃべる)が1発話、●佳男が38発話、里子が13発話、佳乃が1発話、安達真子が2発話、●増尾が10発話、鶴田が16発話(うち1発話は、233頁~235頁の独白(供述)を、まとめて1発話と数える)、博多のタクシーの運転手(出身地不明。福岡市域共通語とも取れるしゃべり)が1発話、●清水勝治が2発話、勝治のいとこの妻(岡山人? どの言葉とも分からぬしゃべり)が2発話、その娘(岡山人 岡山弁らしき言葉をしゃべる)が2発話、長崎市のバスの運転手(長崎市出身か? 長崎弁風のしゃべり)が7発話、長崎市の衣料品店の店員(長崎市出身か? 全国共通語的なしゃべりに肥筑方言風のしゃべりが混じる)が4発話、●テレビのコメンテーター(全国共通語?)が1発話、マスコミ関係者(全国共通語?)が5発話、●長崎(北松?)の警察関係者(やや全国共通語的なところの多い肥筑方言風の言葉をしゃべる)が9発話。計305発話である。

なお、発話の中に、他者の言を引用して述べているものが少なからず有るが、それらについては、一応、発話者なりの自己の言葉への引きつけが有るものと見て、別発話とはしなかった。

2. 分析

2-1 以上の各発話は、福岡市域共通語・博多弁・久留米弁・長崎弁・佐賀弁を中心として、微妙に書き分けられている。次に、これを見て行こう。

それら、九州西北部方言(いわゆる肥筑方言)の中の北部域の諸方言は、相互に共通する特徴も持っている。●例えば、動詞否定形に「断らん」「会えん」のように「~ん」の

形を用いる（「～ない」の形も間々用いられる）ことや、●全国共通語「居（い）る」相当の形として「おる」を用いることが有る（「下」104頁光代「一緒におろうよ」）。●全国共通語「している」の「～ている」に相当する形として「～よる」「～とる」を用いる（間々、似た形で「～よく」「～とく」を用いることが有る。「下」199頁祐一「何かで塞いどくけん」）。●形容詞の語尾を「良（い）い」のようにイ語尾で言うほかに「良か」のようにカ語尾で言うことが有る。●同「良く」のように全国共通語で「～く」で表現するところを「良久」のように「～う」形で表現する（いわゆるク活用形容詞の例が多いが、時にシク活用形容詞についても見られることが有る。「下」234頁鶴田「悲しゅうなるくらい小さかったんですよ」、「同」271頁祐一「それが恐ろしゅうして（これは、語尾に「して」という形が来る点でも若年層の発話としては稀な例）」。●東京弁風のしゃべりの「行くけど」の「けど」に相当する表現としてやはり「けど」を用いるほか、老年層を中心に「ばってん」という形を用いる。●理由を表すのに接尾語「けん」を用いる（理由を表す言い方はほぼこれに統一されている——詳しくは数えていないが40例ほど——ようであるが、福岡の警察関係者がわずかに2例「から」を用いている。「上」185頁「携帯番号からメールや会話の内容まではわかりませんから」、同「事件が事件ですから」。ちなみに長崎の警察関係者などは「けん」を用いている。「上」194頁「おばあちゃんは心配せんでよかけんね」、同「もしまた何かあったら連絡しますけん」、「岡崎のばあさんが駐在所におったけん」）。●「きのうは雨だった」の「だった」に相当する言い方として「やった」を用いる（実際の方言では、一昔前は「じゃった」とも言っていたが、今ではそのように言う人はほとんど居なくなった。また、小説中、稀に「だった」のようにも言う）。また、これに関連して、東京の若年層などが用いる「～じゃん」に相当する言い方として「～やん」を用いる。●肥筑方言のやや古い形「行かんやった」と全国共通語「行かなかった」の混交形「行かんかった」の如き「んかった」形を用いる。●東京風のしゃべりの「～だよ」に相当する表現として、しばしば「～ばい」「～たい」を用いる。●全国共通語の「ようだ」に相当する表現として、時として「ごたる」を用いる。●可能を示す言い方として「行ききる」の如く「～きる」を用いることが有る（「下」145頁佳男「お父ちゃん、なんでも我慢しきるとよ」）。●全国共通語で「行くのか？」と言うときの「の」（いわゆる準体助詞の「の」）を「と」と言う。●目的格を示す言い方として「～ば」を用いることが有る（「下」118頁光代「な、なんば言いよっと」。ただし、若年層では多く「～を」を用いる）。●全国共通語の「すみません」相当の語が「すいません」になる。（九州の若年層では、広くその形に成りつつある。筆者（久留米方言話者）などは「すんまつせん」と言うし、鹿児島弁では古く「すんもはん」であったので、語中の「～い～」が「～ん～」であっても良さそうに思うが、実態は上記の通りである）。

ここまで「福岡市域共通語」と述べて来た言葉は、上記の要件のほとんどを満たす性格のものである（「ばってん」、「～ばい」「～たい」、「ごたる」など一部を除く）。

○「ばってん」

「上」149頁岡崎のばあさん「あんたんとこの買い物ついででよかとばってん」、150頁同「ばってんうちには房枝さんのように車で米を買いに行ってくれる者がおらんもん」。191頁駐在「ばってん、岡崎のばあちゃんに訊いたら」「下」84頁憲夫「祐一ば産んだまではよかったばってん」、85頁憲夫「自分は死ぬ気やったって言いよったばってん」。

○んかった

「上」214頁水谷「帰るまでに雨が止まんかったら、」、220頁珠代「行かんかった」。
「下」205頁依子「もう止まんかったですよ」。類例、「上」37頁佳乃「急に用事ができて行けんくなったらしいったい」。

○「～ばい」「～たい」

「上」134頁憲夫「なんでもかんでも祐一に頼っとったら駄目ばい」、同憲夫「それこそ嫁ももらえんたい」、144頁房枝「バカにされたように思うに決まっとるたいね」、171頁金子美保「会うわけないたい」、同金子美保「四十分だけたい」、193頁房枝「祐一は博多に友達のおったとばいねえ」、201頁三瀬峠の幽霊「もう無理ばい」。「下」15頁祐一「メシやドライブは……そのあとでよかたい」、47頁佳乃「別府に大きなホテルもあるらしいたい」、60頁水谷「回転寿司でもよかたいね」、115頁光代「だけん、昨日言うたたい」、139頁佳男の親戚(女)「行くんなら、私たちも行くたい」、164頁光代「私にはもう何もないたい」、245頁佳男「人間が多すぎったい」。

○ごたる

「上」247頁里子「好いとうごたよ」(やや語形が短縮)。「下」60頁「若葉」の男客「よかごたるな?」、同「95頁憲夫「祐一が、なんかしでかしたごたる」、同「167頁実千代「外に刑事は立っとらんごたるね」。類例、「同」178頁「祐一はいつものごとベッドに寝転んで」。

○「すいません」

「上」107頁福岡の警察関係者「すいませんでしたね」、151頁房枝「あら、すいませんねえ」、216頁「若葉」の男客「あの、すいません」、219頁光代「すいません」「すいません、いつも」。「下」67頁光代「すいません」、68頁同「すいません……」、103頁久留米の警察関係者「すいません、朝早うから」、133頁光代「すいません、」、227頁房枝「すいません」。

2-2 以上のような相互の共通性が有る一方、微妙な差異も見られる。

●博多弁ないし福岡市域共通語では、他の肥筑北部方言で「とやろう(全国共通語の「のだろう」に相当)」を「ちゃろう」、「とやん(東京風のしゃべりで「じゃん」と言うに相当)を「ちゃん」のように変化させる。「上」42頁佳乃の発話「電話したら喜ぶっちゃない」、70頁眞子の発話「三瀬峠って、幽霊出るっちゃろ?」、96頁佳乃の発話「本当に遠い遠い親戚っちゃけん」。「下」185頁里子の発話「正月も働いとるっちゃねえ」(里子の発話、非久留米的)、「下」234頁鶴田「腐るほど見とったっちゃけど」

これに対して久留米弁などは非変形成「とやん」。「上」27頁眞子の発話「ちょっとでも会いたいとやねえ」(非福岡市域共通語的)、「同」97頁佳乃の久留米弁的発話「その人ね、BMに乗るとるとやん」

●久留米弁などでは全国共通語「良(い)いだろう」に相当する表現として「良かろう」と言う。「上」48頁沙里の発話「男の人たちがおったろう」、「同」81頁同「佳乃ちゃんの実家の連絡先知とろう」

これに対して長崎弁などでは「良かやろう」の如く「やろう」形を用いる。「上」113頁憲夫の発話「清水祐一のほうがかっこよかやろが」、「同」242頁佳男の親戚(女)の発話「きつかやろうけど」(この発話、非久留米的)

●増尾の言葉の中には、生得の方言である大分弁（湯布院弁）の影響がチラリと見えるところがある。「上」126頁増尾の発話「旅館には女中がおるんぞ」の「んぞ」。肥筑方言であれば、「とぞ」と言うはずのところである。

●長崎・佐賀では、博多で「くさ」、久留米で「くさい」（ともに、全国共通語の間投助詞「ね」「よ」——「それでね」などの「ね」等相当の表現）を「さ」と言う。「上」133頁の憲夫の発話「うん、祐一がそう言うけんさ」、「同」149頁房枝の発話「どうも飲んだ翌朝はからだの調子がいいとさねえ」、「同」191頁駐在の発話「駐在所で岡崎のはあちゃんに会ったとさ」（これは意味的に他の肥筑方言の「たい」に近い）、「同」同「祐一の車はずっとあったって言うけんさ」、「同」同「それですぐ安心したっさ」（これも意味的に他の肥筑方言の「たい」に近い）、「同」同「祐一も若い男やけん、仕方ないさ」（前同）、「同」同「簡単に言うたら文通相手のようなもんさ」（前同）、「同」199頁祐一の発話「すぐ見つかるさね」、「同」200頁柴田一二三の発話「すぐ見つかるさ」、「同」209頁房枝の発話「すぐ捕まるさ」。「下」35頁光代の発話「延長料金払わんばさ」、95頁房枝の発話「なんか知らん、警察の人が来てさ」、「同」112頁光代の発話「私、酔うとさねー」、「同」113頁同「なんか急に仕事休みとうなつたとさ」。（他の肥後方言の「たい」に近い）

●久留米で「にゃん」ないし「やん」と言うところ（東京弁風のしゃべりの「行かなきゃ」の「なきゃ」相当の表現）を長崎・佐賀では「んば」と言う。「下」35頁光代の発話「延長料金払わんばさ」、91頁憲夫の発話「そこにおらんばよ」96頁実千代の発話「味方になってやらんば」、159頁光代の発話「でも、行かんば」、「同」同「自分のしたこと償わんば」、227頁バスの運転手の発話「会社の広報ん許可とってもらわんば」。

●長崎・佐賀では、東京風のしゃべりで「良（い）いんだけど」の「んだけど」相当の表現として「とけど」を用いる。久留米などではあまり用いない。

「下」12頁祐一「シャレとるわけじゃなかとけど」、「同」75頁同「俺が案内でできればいとけど」、「同」112頁光代「大したことじゃなかとけど」。

●長崎では東京風のしゃべりで「じゃないか」と言うところを「やっか」と表現する（他の肥筑方言では「やなかか」が大勢）。

「下」179頁柴田一二三の発話「俺どこにも行けんやっか」、「同」同「人間どこにでも行けるやっか」、「同」同「俺、どこにも行けんやっか」（上と別箇所）、204頁依子の発話「何でもよかやっか」。

●長崎・佐賀では全国共通語「きれいだ」に相当する表現として「きれか」を使うことが有る（他の肥筑方言は「きれいか」と間に「い」が入るのが大勢）。

「下」199頁光代「きれかねえ」。

●長崎・佐賀では、他の肥筑方言で「とけ」「とこれ」（全国共通語「なのに」相当）を用いるところを「とに」を用いることが有る。

「下」76頁光代の発話「……さっき会うたばっかりとにね」、「同」95頁房枝の発話「なんも関係なはずとに」。

2-3 各方言としては破綻している表現も、少数ではあるが認められる。例えば、●「上」13頁、石橋佳男の発話「お前、そぎゃん大事なこと、なんで今まで俺に言わんとか？」の「そぎゃん」——久留米弁では全国共通語「そんなに」に相当する表現は「そげん」であって佐賀県・長崎県・熊本県の高年層の使うような「そぎゃん」ないしその直音化した

「そがん」(同中年層・若年層が用いる)は用いない。(やや形が異なるが、佳男は「上」248頁では「そげな男と関わるな」と「そげん」に近い形を用いている。また、「下」143頁では「なんしょつとか、こげんか所で」、同「誰がお前ば、こげんか目に遭わせた」、215頁では、「なんであげんことした?」と「～げん」形を用いている。里子も108頁で「なんでそげん」と「～げん」形を用いている)。

●「同」18頁の佳男の発話「手が離せんちなんか? お客さんが待つとらすとぞ」の「す」——久留米弁では、こういう「す」は尊敬語というより、やや対象を軽侮した意味合いを持つので、「待つとらっしやつとぞ」か「待つとらなさつとぞ」でないと変(長崎市・島原市などの長崎弁では敬意を持って使われるものであるため、つい、久留米弁でもと思って佳男に使わせてしまったものかと思われる)。

●「同」21頁の佳男の発話「気をつけて行かやんよ」、娘佳乃の発話「とにかく、もう行かやんけん」の「やん」。これは、破綻というほどではないが、やや若年層風の言い方である。古めの久留米弁では「行かにやん」のように「にやん」と表現する。久留米の若年層の間では、「やん」「にやん」が混在している。

●「同」62頁の沙里の母の発話「あんた、ちゃんと朝は起きられとるの?」。沙里の母が鹿児島市出身の40歳前後の人物とすると「起きれちょっと」(古くは「起きが成つちょっと」と)とでも言いそうである。

●「同」74頁の第一発見者の老人の発話「どうも荷台のロープが解けとるような気になって、ちょうどあすこのカーブで車を停めたんですたい。そいで車ば降りて、なんげなしに崖の下ば覗いてみたら、なんか木の根っこに引っかかるとるですもんねえ。そいでよう見てみたら……。そりゃあ、たまげたですよ」と有るが、その老人が福岡市西郊の方言を喋る人物とすると、この話のあり方は非常に拙い。筆者であれば、次のように描写するであろう。「どうも荷台のロープのほとけとるごた気ので、ちょうどあすこんカーブで車ば停めたとですたい。そいで車ば降りてひよつと崖ん下ば覗いてみたら、なんか木の根方に引っかかるとるですもんねえ。そいでよう見てみたら……そら、たまがったですばい」。

●「同」242頁の石橋佳男の発話「大学生一人、捕まえらんで、何が警察か!」の「らん」。「きらん」または「られん」と有るべきであろう。或いは、そのいずれかの誤植か。

●「上」144頁房枝の発話「またあ、そげんこと言い出して」の「そげん」。房枝は長崎市出身との設定なので、ここは「そがん」と有るべきところであろう。

●「同」221頁光代の発話「そうしてもうかなあ」の「もう」。これは「もらおう」の変形形で「もろおう」の如くなつたものを写したものと思われる。やや語形が短縮し過ぎか。

●「同」247頁佳男の発話「付き合いようとか?」、妻・里子の発話「好いとうごたよ」の「とう」。久留米弁では全国共通語「～ている」に相当する表現は「～よつ・～とつ」ないし「～よる・～とる」であって博多弁の如く「～よう [ヨー]・～とう [トー]」となることは無い。博多からの言語的影響は次第に及びつつあるものの、まだ佳男ぐらいの年代(2002年時点でちょうど40歳に設定)の久留米弁では「～よう」といった形は用いないであろう。その証拠にという訳でもないが、そのすぐ後に里子が「旅館を経営しとるお家の」と「～とる」を用いている。ちなみに、「～よう・～とう」は博多以外では、佐賀県の多久市あたりを境にして西側の地域でも聞かれるようである(東側は「～よつ・～とつ」)。

●「同」261頁の佳乃の発話「なんしちよると? こんな所で」の「ちよる」。佳乃の生得の方言、久留米弁では全国共通語の「～ている」に相当する表現(の一つ)は、上述の如く「～とる」であり、福岡市で使っていたであろう福岡市域共通語でも「～とる」ないし「～とう [トー]」

であって「～ちよる」は使用しない。九州で「～ちよる」を使う主な方言は、大分弁・北九州弁（豊前弁）・鹿児島弁・島原弁などであり（筑後域の東部、うきは市あたりでも使うことが有る）、佳乃が語りかけた相手が大分県出身の増尾圭吾であることから、相手に親しみを込めて使ったと無理に取れば取れないことも無いが、すぐ後の262頁で「ちょっと、ちょっとだけ待って」という具合に「～とる」を使っているところを見ると、ここは、作者のうっかりミスであろう。●「下」45頁の佳乃の発話「あ～、私、この曲、マジで好いと～と～」の「～と～」。上記「上」247頁の佳男・里子の発話に見える例についてと同様の理由で、ここも表現の破綻と見得るかと思うが、佳乃が短い期間ではあっても博多で生活しているとされていることを考慮に入れると、ここは博多弁ないし福岡市域共通語の影響を受けて、佳乃がたまたまそれ風の言い方をしたものとも取れる（参考として、佳乃の同僚で鹿児島市出身の谷元沙里が「上」70頁で「佳乃ちゃん、もう出勤しとうよね？」、熊本県人吉市出身の安達真子が「そりゃ、しとうよ」と「～とう」を用いている例が挙げられる。沙里は、「同」48頁でも「佳乃、覚えとう」、73頁でも「増尾圭吾って知っとうよね？」と「～とう」形を用いている。ただし、真子も「同」82頁で「実家に戻っとうかもしれんね」の如く「～とう」形を用いているが、71頁では「留守電になっとうみたい」と非「～とう」形を用いている）。●「同」84頁、憲夫の発話「あげん所で働けば」の「あげん」。憲夫は長崎市出身という設定なのでここは「あがん」と有るべきところであろう。「同」90頁、祐一の発話「こげんことにはならんやった……」の「こげん」。祐一は長崎市の生まれ育ちとの設定なので、ここは「こがん」と有るべきところであろう。「同」135頁、祐一の発話「そげんことしたら、光代に迷惑かかる」も、同様の理由で「そがん」と有るべきところであろう。「同」135頁、光代の発話「私だけ、こげん所に置いていかんでよ」「こげん所に、」。の「こげん」も、光代が佐賀市の生まれ育ちと設定されているところから見て「こがん」と有るべきところであろう。「同」210頁の光代の発話「一日がこげん大切に思えたことなかった。」の「こげん」。同様の理由で、ここは、やはり「こがん」と有るべきところであろう。

3. まとめ

3-1 以上、述べ来った如く、小説『悪人』は、わずかの方言描写の破綻を含みながらも、きわめて巧妙に肥筑北部方言の描写に成功している。その破綻の割合は、佳男が5発話/98発話=5.1%、里子が1発話/39発話=2.6%、沙里の母1発話/1発話、第一発見者の老人が1発話/1発話、佳乃が1発話/125発話=0.8%、房枝が1発話/118発話=0.8%、光代が4発話/258発話=1.6%、憲夫が1発話/58発話=1.7%、祐一が2発話/169発話=1.2%であり、全体で17発話/1725発話=1.0%である。

3-2 この巧妙な方言描写の背景として、「0. はじめに」でも述べた如く、筆者は作者吉田修一の方言体験もしくは方言情報の提供者が有ったと見るのであるが、これは当を得ているであろうか。作者の小説執筆の舞台裏を覗いてみたいものである。

4. 付けたり：文学的見地から

4-1 小説『悪人』は、上記のように非常に良く方言文学として大きな破綻も無くまとめられていると言って良さそうであるが、文学的見地から眺めた場合若干気になる点が無くも無い。これについて触れておく。問題としたい一つは、作中人物増尾圭吾が、何ゆえ石橋佳乃を三瀬峠で車から蹴り出して、佳乃の死につながる元を作ったかという点。

圭吾は「あんたさ、なんでよう知りもせん男の車に、こうやってひよこひよこ乗ってくるわけ？ 女ならふつう断るやろ。こんな夜中にとつぜんドライブに誘われて、ほいほい乗り込んでくる女なんて、正直、俺、タイプじゃないったいね。降りてくれん？ 自分で降りらんなら、俺が蹴り出してやろうか？」といて佳乃を自分の車から冬の夜の峠に蹴り出すのである（「下」48頁）。しかし、二か月ほど前の天神のダーツパーでは、佳乃たち平成生命の女の子が帰ろうとするのを追いかけて「メルアド教えてよ。今度、メシ食いに行こうよ」と誘い、友人の鶴田公紀に「だけん、俺、今の子みたいなのが好みなんよ。なんかこう、一皮剥けきらん感じがあるやろ？ いっぱしにヴィトンのバッグ持って、ツンツンしとるわりに、どっかこう田舎の姉ちゃん臭が残とってさ。ヴィトンのバッグ持って、安物の靴履いて、田んぼの畦道を歩いとう女がおったら、俺、絶対に我慢できずに飛びかかるね」とまで言っていたのである（「上」124頁）。この前後の差は何に由来するか。

「下」150頁に、釈放された増尾が取り巻きの友人たちに次のように語る場面がある。「なんかさ、どよんとした目つきで俺のことを見るわけ。どっか連れてって、て目で。こっちもムシャクシャしとるし、この尻軽女どっかに連れてって一発かませばすつきりするかなぐらいの気持ちで車に乗せたんやけど、乗せたとたん、餃子食うてきたらしく、息は臭かし、一気にテンション下がってさ。結局、三瀬峠まで走ったあと、いい加減、我慢できんようになって、置き去りにしてやった」。これでは、佳乃は、つまるところ口臭が主な原因で死の淵に沈んだことになる。いくら作中人物とはいえ、あまりにも哀れと言うべきであろう。聊か、このあたり、物語の筋の設定に無理が無くは無いか。

4-2 いま一つは、祐一と佳乃の出会いをめぐる問題。祐一は、6歳の頃に母に島原のフェリー乗り場に置き去りにされ、その後、祖母の房枝とその夫勝治のもとに引き取られて育てられたのであるが、フェリー乗り場で帰って来ない母を待っていた時のエピソードが次のように表現されている。

あれは最終のフェリーが出ようとしたころだった。待ちくたびれて岸壁沿いを一人で歩いていると、駐車場のほうから、一人の女の子が駆け寄ってきた。歩けるようになって間もないのか、勢いのついた自分の足を、どう扱えばいいのか分からないようだった。駆け寄ってきた女の子を、祐一は抱きとめた。ほっとした女の子の顔を、祐一は未だに覚えている。あとを追いかけてきた父親が、娘を抱え上げようとすると、女の子が手に握っていたちくわを、祐一のほうに差し出した。祐一は断ったが、その父親が、「さっき買ったばかりやけん、食べんね」と手渡してくれた。祐一は礼を言って受け取った。

考えてみれば母親がいなくなり、翌朝、フェリー乗り場の係員に発見されるまでの間、唯一口にしていたのがあのちくわだった。（「下」257頁）

この女の子は誰であろうか？ 祐一は2002年時点で27歳、佳乃はく今年の春、短大を卒業

し>と有るのでどこにも引っかかかっていなければ20歳。二人の間には7歳の年齢差が有って、上記の1、2歳ぐらいの女の子との祐一の年齢差4、5歳とは必ずしも重ならないが、「女の子の顔を、祐一は未だに覚えている」などと有ってどうも気になる。最終のフェリーが出るところで駐車場に車を駐めていたところを見ると、父親は島原の地元の人間（見送りの人物）かとも思われるが、地元の人間が果たして港でちくわなど買うであろうかと思われる。その言葉は島原弁とも取れそうであるが、一步踏み込んで考えて、佳乃の父佳男の久留米弁と取っても言語的矛盾は無い。幼い佳乃と、父佳男が（家族連れで）泊りがけの小旅行に来ていた——そして幼い祐一と出会った、と考える余地は無いであろうか。

もし、仮にそのようなことが考えられるとすれば、古めかしい言い方ではいわゆる因縁話めくのである。作家吉田修一の中にそのような古めかしい体質を認めて良いものか非常に気になりなところであるが、全編ひっくり返しても、他にこの件について言及したところは無い。やはり、筆者の考え過ぎというところであろうか。

【注】

- 1 wikipedia に依る。

なお、本稿を成すに当たって、底本とした朝日文庫本の入手等に関し、友人野内友美氏の手を煩わせた。記して、感謝申し上げる。同氏によれば2011年2月にもなれば映画版のDVDが入手可能となるであろうという。筆者は、残念なことに映画上映期間中に忙しく、これを見るを得なかった。DVD発売を楽しみに待ちたい（2010.11.30記）。